金大医保紀要 Vol. 20
115～118　1996

看護臨床実習前後の行動特性とストレスコーピングの変化

河村　一海　　西村真実子　　永川　宅和

KEY WORDS

Stress Coping, Behavioral Characteristic, Student Nurse, Nursing Practicum

はじめに

看護教育では，専門の知識・技術の習得とともに，積極さや活発さなど看護婦として望ましい行動を育成することを目指している。その中で臨床実習の果たす意義は大きく，学生は実習体験の効果により，バランスのとれた人格形成が望まれる。

我々は看護学生の行動特性やコーピング方法についてこれまでに検討してきた[1)2)3)]。

コーピングとは個人がストレスを認知した場合の適応状態に達しようと対処するプロセス[4)]のことである。コーピングをストレス認知場面での一つの行動特性として考えた場合，実習体験を通して実習目的を反映するようなコーピング方法を身につけていくことが望ましいと考えられる。

そこで今回，臨床実習前後の学生の行動特性とストレスコーピングの変化について検討した。

対象と方法

1．対象

K大学医療技術短期大学部看護学科平成5年度生78名であり，年齢は20～21歳であった。

2．方法

1）行動特性の測定

行動特性の測定にはJenkins Activity Survey (Student Version)（同志社大学心理学研究室版）（以下JAS）[5)]を用いた。

JASは本来，冠動脈疾患のリスクファクターとしてのタイプA行動パターン（以下タイプA）を評価するための質問紙である。今回はJASの3つの下位尺度を用い，AB尺度により活動性や衝動性を，H尺度により精力的，競争的な行動特性を，S尺度により行動の速さ，気短さなどの行動特性を評価した。

2）コーピングの測定

コーピングの測定には，近澤らの作成したストレスコーピングスケール（以下コーピングスケール）[6)]を用いた。

これは問題解決的コーピング，感情調整的コーピング，回避的コーピングの3つのカテゴリーから構成される。各カテゴリーは10項目から成り，各項目はストレスに対する行動を「よくやりがち」から「全くしない」の5段階で評価するものである。

各カテゴリーの概念は以下のように定義される。すなわち，問題解決的コーピングとはストレスの原因やその解決の方法を考え，実行しようとする意識的努力や行動を意味する。感情調整的コーピングとはストレス認知の結果生じた否定的感情を制御したり，耐えたりする意識的努力や行動を意味する。また回避的コーピングとはストレス源から逃避したり，否定的な感情を否定・無視しようとする行動，および緊張を一時的に解消・軽減しようとする行動を意味する。

3）実習経験による学び

臨床実習は学生が看護婦としての望ましい行動特性やストレスコーピング方法を学習する機会でもある。従って実習体験を評価するものとして，3年時の臨床実習の成績を用いた。成績は実習各分野ごとに優を8点，良を7点，可を6点と得点化して全実習分野の得点を合計し，合計得点により平均点＋標

金沢大学医学部保健学科看護学専攻

準偏差以上の学生を成績上位群，平均点－標準偏差以下の学生を成績下位群とした。

4）調査方法

調査は記名自記式，配付留め置き法で行った。その際，調査結果は今回の研究以外に使用しないこと，強制回収はしないことを学生に約束した。調査時期は3年時の約10カ月の各論実習の前後，すなわち実習前を平成6年12月～平成7年2月とし，実習後を平成7年12月～平成8年2月とした。

5）分析方法

JAS各尺度およびコーピングスケールの各カテゴリーの得点の実習前後における比較にはt検定を，実習成績とコーピング方法の関係については二元配置分散分析を用いて検討し，危険率5％以下を有意差ありとした。また看護婦を対象にした近澤らの結果[7]をコーピングスケールの標準値とした。

結　果

1．調査の回収率

調査用紙の回収率は実習前が74.4%，実習後が84.6%であり，回収したものの中で前後の比較ができる者は54名（69.2%）であった。

2．行動特性の得点の変化

表1は実習前後のJAS各尺度の平均得点と標準偏差を示している。3尺度とも実習後の得点が実習前よりわずかながら上がっており，AB尺度（活動性や衝動性を測定する尺度）では5.4±2.8点が6.0±2.8点に，H尺度（精力的あるいは競争的な行動特性を測定する尺度）では8.9±3.7点が9.3±4.5点に，S尺度（行動の速さや気短さを測定する尺度）では14.3±5.8点が15.1±5.8点となっていた。

3．コーピングの得点の変化

表2は実習前後のコーピングスケールの各カテゴリーの平均得点と標準偏差を示している。問題解決的コーピングは実習前が33.8±4.5点に対して実習後は34.0±4.6点と得点がわずかに上がったが，感情調整的コーピングと回避的コーピングはそれぞれ34.1±4.6点から33.3±4.4点，31.2±4.1点から29.0±4.7点と得点が下がっており，回避的コーピングにおいては得点に有意差を認めた（$p<0.05$）。つまり，実習後に回避的コーピングをとる傾向が少なくなるという結果を示した。

また，これらの結果を標準値と比較すると，感情調整的コーピングと回避的コーピングの得点が実習

表1　実習前後の行動特性（JAS）の得点

	実習前	実習後	t
AB尺度[1]	5.4±2.8	6.0±2.8	-1.70+
H尺度[2]	8.9±3.7	9.3±4.5	-0.58
S尺度[3]	14.3±5.8	15.1±5.8	-1.29

[1] AB尺度-活動性、衝動性　　+$p<0.1$（n=51）
[2] H尺度-精力的、競争的な行動特性
[3] S尺度-行動の速さ、気短さなどの行動特性

表2　実習前後のコーピングスケールの得点

	実習前	実習後	t
問題解決的コーピング	33.8±4.5	34.0±4.6	-0.43
感情調整的コーピング	34.1±4.6	33.3±4.4	1.22
回避的コーピング	31.2±4.1	29.0±4.7	3.69＊

＊$p<0.05$　（n=54）

表３　実習成績別の実習後のコーピングスケールの得点

実習成績 / コーピングスケール	上位群 (n=10)	下位群 (n=11)	t
問題解決的コーピング	36.7±5.5	33.8±5.1	-1.24
感情調整的コーピング	32.0±5.0	36.3±4.5	2.06+
回避的コーピング	26.3±5.9	31.4±2.7	2.56＊

成績上位群：M+1SD　　＊p<0.05　+p<0.1
成績下位群：M-1SD

表４　実習成績別の実習前後の回避的コーピングの得点

	実習前	実習後
成績上位群（n=10）	29.0±3.5	26.3±5.9
成績下位群（n=11）	31.8±4.0	31.4±2.7

表５　実習成績と実習前後の回避的コーピングの関係（二元配置分散分析）

	自由度	平方和	平均平方和	F	p
実習成績	1	162.703	162.703	9.307	0.004
実習前後	1	26.063	26.063	1.491	0.230
交互作用	1	13.205	13.205	0.755	0.390
個人差	38	664.282	17.481		

後に下がり，標準値により近い値になっている。

４．コーピング得点と実習成績の関係

表３は実習成績別の実習後のコーピングスケールの平均得点と標準偏差を示している。問題解決的コーピングでは成績上位群が36.7±5.5点と下位群33.8±5.1点より得点が高かった。しかし感情調整的コーピング，回避的コーピングでは逆に成績下位群が上位群より得点が高く（感情調整的コーピング：下位群32.0±5.0点，上位群36.3±4.5点，回避的コーピング：下位群26.3±5.9点，上位群31.4±2.7点），回避的コーピングにおいては得点に有意差を認めた（$p<0.05$）。つまり，成績上位群においては回避的コーピングをとる傾向が少ないという結果を示した。

実習前後における回避的コーピングの得点の変化と実習成績の関係を示したのが表４であり，これの二元配置分散分析の結果が表５である。回避的コーピングの得点は全体の実習前後の変化でみると有意差はみられなかったが，実習成績（上下位群）別でみると成績下位群に比べて，上位群の方が低かった。

考　察

今回の結果では，実習前に比べ実習後の回避的コーピングの得点が低くなっていた。これは，今回の対象の実習前における回避的コーピングの得点が標準値より高いことが関連しているともいえるが，実習体験によってそれが低くなったことは興味深い。

この理由については，実習成績別の実習前後の回避的コーピングの得点が示すように，成績上位群の

回避的コーピングの得点が，実習後にかなり低くなったためと考えられる。

回避的コーピングという概念は，近澤ら[8]がコーピングスケール作成時にLazarusの「コーピング方法と感情の関係」に対する考え方から抽出して独自に取り上げたものである。Folkman[9]はポジティブな感情は効果的な問題中心のコーピングを促進し，ネガティブな感情は感情中心のコーピングを促進すると仮説的に規定している。

今回は実習における学生の感情については検討していない。しかし，成績上位群は実習に対して「張り合いになる，楽しい，やりがいがある」といったポジティブな感情をもつものが多いことが推測される。もしそうならば，ポジティブな感情が回避的コーピングを低下させた一因であるとも考えられる。回避的コーピングとは，例えばふて寝や飲酒，間食などで気を紛らわすといったような感情中心のコーピングの一種である。

また．今回の対象では実習前より実習後において感情調整的コーピングと回避的コーピングの得点が標準値に近くなっている。このことは実習後においては，看護学生はどちらかというと一つのコーピング方法に偏って物事に対処しているのではなく，3種類のコーピング方法をバランスよく使用しているといえる。しかし，この理由が実習のみの影響とはいえない。コーピングには信念やコミットメントなどの個別的要因や，出来事のタイミングや予測性などのその時々のさまざまな状況要因が関連していると考えられる[10]。また，今回は実習体験の評価指標として実習成績を用いたが，実習体験を実習成績だけでは十分に表せていないとも考えられる。今後はこれらについても加味し検討していく必要がある。

まとめ

実習前後の看護学生のストレスコーピングにおいて，実習後では実習前より回避的コーピングをとる傾向が少なくなり，この理由として成績上位群が回避的コーピングをとる傾向が少なくなったことが考えられた。

文　献

1）河村一海　他：看護学生のストレスコーピングと行動特性の関係，金大医短紀要，19：123-125，1995.
2）河村一海　他：看護臨床実習前後の行動特性と性格特性の変化，金大医短紀要，18：125-127，1994.
3）河村一海　他：看護学生の行動特性と性格特性の関連について，金大医短紀要，17：181-186，1993.
4）近澤範子：看護婦のBurnoutに関する要因分析　―ストレス認知，コーピングおよびBurnoutの関係―．看護研究，21(2)：37-52，1988.
5）佐藤　豪　他：Jenkins activity survey (J.A.S.) 学生用の検討　―項目分析と因子分析による検討―．札幌医大人文自然記，23：15-23，1982.
6）近澤範子：前掲論文4），P42
7）近澤範子：前掲論文4），P46
8）近澤範子：前掲論文4）
9）Folkmam, S.: Personal control and coping process: A theoretical analysis, J. Personality Social Psychology, 46(4): 839-852, 1984.
10）Lazarus, R.S. et al., 本明　寛　他監訳：ストレスの心理学．第1版，123-128，実務教育出版，1991.

The Change of Behavioral Characteristics and Stress Coping Pattern before and after Nursing Practicum

Kazumi Kawamura, Mamiko Nishimura, Takukazu Nagakawa